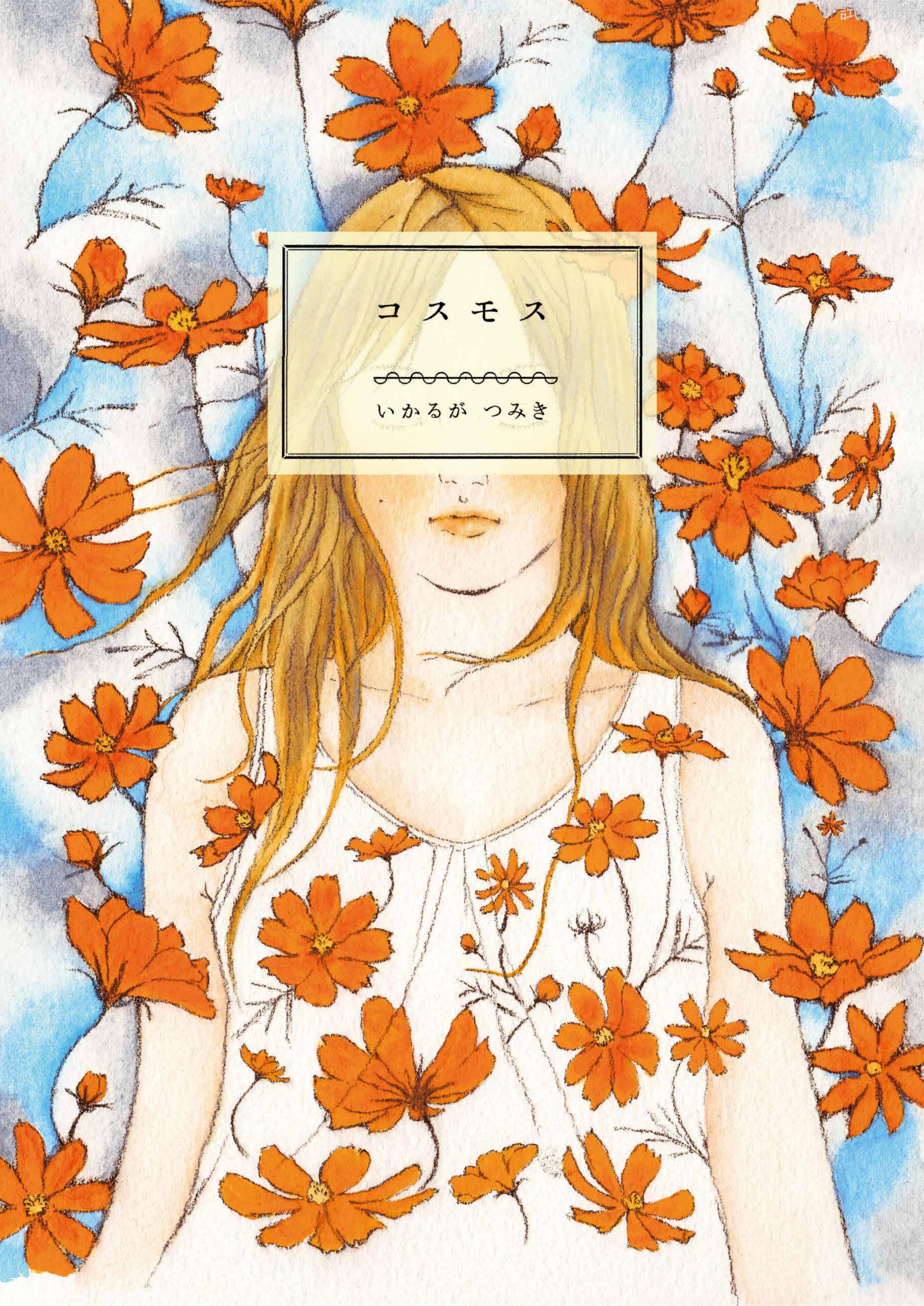


# 試し読み

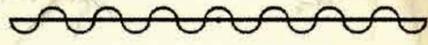
コスモス

知古文庫

当ファイルを許可無く印刷またはインターネットを介して  
第三者へ配布することを禁じます。



コスモス



いかるが つみぎ



もくじ

	燕	10	デジタルフォトフレーム	41
	高架下	13	アネモネ	43
	物置	15	バーコード抄	45
	惜別	17	天然系	52
	プロポーズ	20	カルア・ミルク	55
	二倍の女	21	サンプルテキスト	58
	イミテーション	24	妄想課金	60
	雨男、雨女、雨犬	29	コスモス	67
	猫カフェ	33	(無題)	71
	プレゼント	35	電気ウナギの恋	89
	ルチャドール	39	たとえ話	90



コ  
ス  
モ  
ス

猫カフェ  
ねこかふえ

「今日云わなければいけないと思っただ」僕は思いきった。思いきりすぎて、きつと、怖い顔をしていたと思う。だって、怪訝そうな顔をされたから。にやーん。「どうしたの？」冷静にそう返されたところで、僕も冷静に戻った。のぼせていると、舌が回らなくなるんだ。こういうことは、ちゃんと伝えなきゃいけない。「ごめん……、ちよつと緊張してしまつて」気がつく、君の肩を思いきり掴んでいた。にやーん。手を離すと、君は少し笑つて、僕の顔を振りかえつた。「なにか、話したいことがあるの？」いつだつて、僕は君のペースに乗せられている。僕がこういうふうに舞いあがつたとき、君が諫めてくれる。にやーん。僕は、もういちど、云うべきこと葉を頭の中で整理する。君は僕の顔を見詰めた儘、少しじれつたような顔をする。にやーん。僕が道に迷つたとき、君が傍そばにいてくれれば、勇気がでるんだ。にやーん。僕がく

じけそうになったとき、君が傍そばにいてくれれば、がんばれるんだ。にやーん。そして、僕には夢がある。にやーん。おおきな夢だ。にやーん。君を幸せにする。にやーん。「僕と、」にやーん。

「僕と結婚してくれ」にやーん。にやーん。みやーん……

「それって、ここで云わなきゃならない話？」

全くその通りにやーん……

## 妄想課金

もうそうかきん

吊り革につかまった腕が、武骨という程荒々しくもないが、だけど力強くたくましい。体軀からみても、ちょうどいいバランス。あの腕に抱きしめられたのなら、さぞ気持ちいいことだろうな、なんて、顔は文庫に向けた儘、メガネの端から覗き見していた。

「想像するだけならタダだし……」なんて思っていたら、請求書が届いた。  
1万3千円也。

妄想していた内容からして、額面は妥当かも知れない。取り敢えず、給料日まで待とうと思つた。

次の日に、あの腕の人はいなかった。代わりに、少し歳をとった男が2つめの駅から乗りこ

んできて、隣の吊り革につかまった。

少しかさついた指をしていたが、皺しわが深く刻まれ、くつきりとしたコントラストをみせる。背広を着込んでいるが、なにか手作業をする仕事なのだろう。指の動きに無駄がない。新聞を見詰めるまなざしは、やはりなにかの職人、活字活字を、ぶれることなく、選別するかのよう  
に鋭く追っている。

妄想……

請求書は夜に届いた。

額面は昨日よりも高かった。これは、タレントのギャランティーが一律でないように、人によつて変わるといふことなのか。きつと、昨日の男の人よりもいい仕事をするにちがいない。

翌朝、ポストの中に追加料金の請求書が入っていた。

その朝は、電車に乗ると私のまわりに、なん人か、中学生のグループが乗りこんできた。さすがにそういう趣味はない。中に、ひと組の男の子と女の子が、つきあっているのか、まだ意識し合っているだけなのか、少し恥ずかしそうに頬あかを赧うっむらめて並んでいる。俯うつむいた姿が初々しい。

妄想なんてできるか。

家に帰って、請求書に書かれていた番号へ電話した。

「すみません……明日は、もう少しまともなものを派遣しますので……」  
お金を払うのだから、もつともだ。

「ただし、指名料が発生します」

次の日の電車の中にいたのは、私と同世代のOLたち。もう、なにがなんだか判らない。頭  
にきて、お金なんか払ってやるものか、と思っていたが、どうやら電車が遅延しているらしい。  
私は、遅れていた、いつもより一本前の電車に乗っているようだった。そこで、途中の駅で一  
度降りて、いつも電車へ乗り換えることにした。

遅延している電車だけあって、満員だった。

迷惑なのは判っていたが、いつもの吊り革の場所へ、私は人を押しつけついで。さあ、  
今日は素晴らしい妄想ができるに違いない。

だけど困った。

これだけ混んでしまつては、隣にくる人の、顔どころか、姿さえみえない。背中からぐ  
いぐい押され、身体の向きを変えることもできない。

その時気づいた、太腿を触られてる。

なんてやつらだ。これは、また、種類が違う。確かに、この状況下では、妄想を掻きたてる正しい手段かもしれない。しかし、ユーザーの意志を考慮していない、いきすぎたサービスだ。憤慨。すぐに例の番号へ電話を掛けた。

「本日は事情が事情でしたので、派遣を取りやめさせていただきました。今日現れたのは、別の業者のかたかと思われます……」  
確かに。考えてみれば、ポストに請求書が入っていない。ひとまず落ち着いて……今日は不運だったとあきらめることにした。

翌日。

この日はなぜか車内がすいていた。木曜日にもなれば疲れが溜まる。私は迷うことなく、あいた席に腰掛け、目を閉じ眠ってしまった。

請求書には指名料だけ記載されていた。

どうして、こう、うまくいかないのだろう。今日は金曜日。25日は日曜日だから、今日、給料が振りこまれている筈。

ならば、いつそのこと、気絶してしまうくらいのも、もの凄い妄想をしてやろう。自分へのご

褒美——その男は私より少し若めで、細めな印象もしたが、たくましい口元をしていて、なに  
より、今までの男より清潔感があつた。耳元で、少しひそめて「突然すみません、」声は体つき  
よりも低く、心地いい響きかた。「いつもあなたのこと見ていたんです、」瞼に焼きつけた通り  
トレースしてくる台詞。「怖がらせてしまったのなら、すみません、」少しくらいの恐怖は、却つ  
てスパイスのようなもの。「唯……伝えたかったです、」そう。情熱は少しずつボルテージを  
あげていくもの。ただし、乗り換えまでの30分で収めて。「よかつたら……、」悪いことなんて  
なにもない。この、私の中の世界でなら、なにをしたって構わないのよ。「今度、お食事でも」  
居眠りから落ちたのかと思つた。違う。今度？ なにを云っているの？ あなたとは、今、  
この電車の中だけの関係で……なんて思つていたけど、その男は、まっすぐに私の目を見詰め、  
確かにそこに佇<sup>た</sup>っていた。

よく見れば、好みだけならもつと私のタイプの男が、話しかけてきた男のうしろで、苦虫を  
噛み潰したような顔をしてうろたえている。

すると、この人は……現実？

応えのない私に、眉が少し悲しそうに歪んだので、私は思わず、はい……よかつたら……今  
夜……、

時に、現実には妄想よりも夢のようであり、ともすると、なにかもが境い目のない夢のように思えてしまう。ふわふわと感覚の削がれた、中毒のような状態に陥る。

その日、電車の中で渡したアドレスに、すぐにレストランの場所を送ってきた。高いお店ではなかった。だけど、時間どおりに席に座って待っていた彼の印象と、気取らず、手が届かない程洒落すぎている、小気味のいい店の雰囲気、いつそう好感を高めた。

誠実な話。誠実な恋。誠実な関係。

彼は、私の部屋に置いてあった請求書を見て、「こすい商売だよ」と破り捨てた。

それからの日々はしあわせだった。半年後にはふたりで住み、一年後には誓いあった。

ふたりの部屋には、リネンのクロスを掛けた、ささやかなソファを買って。

寄り添って観られるように、少しちいさめのテレビを置いて。

壁にはモダンな絵を飾って。

のんびりと歩く、ふわふわの白い犬を。

週末のドライブのために車を。

落ち着いたら行こうと約束していた、ヴェニスまでの旅行券。

誕生日には、欲しがっていた腕時計。

クリスマスには万年筆。

仕事で疲れたときのためにマッサージ・チェア。

新調したスーツ。

それに合わせて靴。

ブランドものの革の財布。

忘れていた、車検の代金。

彼は現実で、業者でも、詐欺師でもない。本当に本気で愛しあつた。だけど諸々の理由で私たちは別れた。結局、最後にはなににも残らなかつたんだ。

まあ、なにしろ、全部妄想だし。

ぴろぴろ　　ぴろぴろ

ぴろぴろの話しよう。

さめざめ雨の降る中、しんしんと更けていく夜、りんりん鳴った電話をひらひら手の内で踊らせて、「もしもし」——彼女だ。

彼女はぴかぴかしたミラー・ボールがくるくる回るつるつるのホールで、ばきばきに叩くりズムのドラム、ぎらぎらした男たちと、つやつやした女のあいだを、ふわふわと——Angel、舞うように、さらさらした髪、そろそろと慎重なステップから、どんどん早まるがんがんなビートへ、ぽんぽん変わるサウンドを、うねうね腰をくねらせながら、ゆらゆら漂っていた。

まず、きんきんに冷えたビールをオーダー。もじもじしたチキンなボーイが、とろとろして

いたもんだから、「のろのろしてんじやねえよ」ってごうごうと罵ったら、「まあまあ」なんて云われちゃった。

「おいおい、おめえ、そのねじねじしたスカーフ、ちよつとけばけばしてんじやねえか？」って、彼女に云ったら、急につんつんした態度でばちばち俺の頬を叩いて、づかづかどつかへいつちまった。

じろじろ見てるヤツら。俺ア、いらいらして、ぽきぽき指を鳴らしながら、「なに見てんだ！」って、がつかつ前のめりで、ぺらぺら捲したててやったぜ。

また来やがった、がりがりのチキン・ボーイ。取り敢えず、こいつのふさふさした髪をぐりぐり掴んで、ずるずる引きずり廻す——みせしめだ。

持っていたスナックをざくざく頬ばりながら、どくどく脈うつボーイのべとべとしたコメカミを、めりめり締めあげ、鼻たかだかにホールのヤツら、もろもろ威嚇する。

「やめて！」——彼女。

うるうる潤んだ瞳。俺の胸板をばしばし叩きながら、「どうしてこんなことするの！」と、きつきつのホット・パンツからぴちぴちの脚をむちむちさせながら、詰<sup>な</sup>詰<sup>じ</sup>る。

もう力つきてぐねぐね倒れこむ、ボーイ。

しくしく泣いてくたくたになった、彼女。

酒が廻ってふらふらになった、俺。

ぬめぬめした床に、割れてとげとげしたグラスと、どろどろ流れだす酒。

そこへ突然、ほろほろ鳥！——啼いた！「ぴろぴろー」